

聖霊降臨後第24主日のミサ固有唱解説

この翻訳の元になったフランス語版は、Una voce France の下記のサイトで閲覧できます。フランス語サイトではフランス語による解説（内容はこの翻訳とほぼ同じ内容）と共に、固有唱と Kyriele XI, Credo I の録音も聞くことができます。

<http://www.unavoce.fr/content/view/707/60/>

「良い麦と毒麦を分ける」（善人と悪人を区別する）という言い回しは（フランス語で）日常使われる表現ですが、その元になったのはマタイ福音書の譬え話^(訳註 1)です。ところで聖書のその他の箇所では毒麦の話は出てきません。毒麦は小麦やライ麦や大麦と同様、イネ科の植物です。この植物はどこの土地でも収穫の時、良い麦に混じって生育しています。

ついに 2012 年 11 月 11 日、聖霊降臨後第 24 主日となりました。朗読は御公現後第 5 主日の箇所が使われます。

少し説明させていただく必要があります、というのも典礼暦の一年の終わりの時期に、この主日が毎年あるわけではないからです。グレゴリオ聖歌聖務日課は聖霊降臨から待降節にまたがるこの時期に 24 主日しか割り当てていません。しかしこの時期の長さは復活祭の日取りによって決まるので、御公現後の主日の回数を省略した年には、省略された御公現後の主日の集会祈願と朗読が、聖霊降臨後第 23 主日より後の主日のミサで使われることになるのです。秋の最後となる第 23 主日の聖歌が、それ以降の聖霊降臨後の主日のミサで繰り返し歌われます。

しかしまたグレゴリオ聖務日課上、第 24 主日に割り当てられているミサには、その後すぐに待降節が控えているという特別な役割もあるのです。そのため典礼暦に収まり切らない聖霊降臨後の主日のミサは、グレゴリオ聖歌典礼暦の第 23 主日と第 24 主日の間に位置づけられています。第 24 主日のミサが、ミサ典書では聖霊降臨後最終主日のミサとなっているのはそのためです。しかし本当に聖霊降臨後最終主日となるのは 11 月 25 日で、その翌週からはご存知の通り待降節が始まります。

入祭唱: *Dicit Dominus*

何週間も前から教会の思いが徐々に、世の終わりへと向かっているのをこれまでに見てきました。私たちが今、生きているのはその時代なのです。たとえ主が再び来られるまでにまだ何世紀もかかるとしても、それは私たちには知り得ないことです。世の終わりは不安と不確実性の時代で、私たちはその事に気づいています。すなわち地上の信仰は冷め、偽預言者が現れ、人々は途方に暮れています。そのためこの時期の主日の典礼は、主に向かつての不安に満ちた呼びかけに満ちています。中でもとりわけ詩編 129 の *De profundis*（深き淵より）を用いることによって。この詩編はすでに聖霊降臨後第 22 主日の入祭唱にも使われていましたが、今回はアレルヤ唱と奉献唱に使われています。

しかし、こうした呼びかけに対しての、平和と希望に満ちた主の御言葉を見つけることも出来ます。私たちが忠実で、主に信頼をおくなら、何も恐れることはないのです。そんなわけで、第 23 主日の入祭唱では神が預言者エレミヤの口を通して私たちに語りかけられます。エレミヤはイスラエルの民の大部分がバビロンに捕囚され、捕囚の民の士気があまり上がらず、絶望的になり、不幸を告げる預言者たちがありとあらゆる災禍を宣告していた時代のエルサレムにいました。そこでエレミヤは彼らを安心させ、神への信頼を呼び起こそうと努めます。神は次のようなメッセージを送って彼らの幸せを願い、彼らを解放しようと告げられるのです。

Dicit Dominus: ego cogito cogitationes pacis, et non afflictionis: invocabitis me, et ego exaudiam vos: et reducam captivitatem vestram de cunctis locis.

主は次のように言われた。私の思うところは平和であって不幸ではない。あなたたちが私に乞い祈れば聞き入れよう。あなたたちの捕囚の民を全地から連れ戻してあげよう。

エレミヤはこうして捕囚の民に遠からぬ帰還を告げたのですが、この続きの箇所ではまた、より精確な言い回しでそのことを預言しています。この聖句は私たちにとっても現実味のあるものです。私たちもまた試練と不安の時代を生きていますが、主は私たちがご自身への信頼を失わないようにと招いておられ、私たちが囚われている罪から解放してくださるからです。

この入祭唱の旋律は静けさと平和に満ち、一種の荘厳ささえ感じられます。それは語っておられるのが神ご自身だからです。*pacis*（平和）の歌詞の部分での美しい高まりと、*invocabitis me*（私に乞い祈りなさい）の歌詞の部分の急き

立てるような誘い、*exaudiam vos*（あなたたちの祈りを聞き入れよう）の部分の大きい優しさが印象的です。終わりになればなるほど、静けさと安堵が増していきます。

この入祭唱には詩編 84 の最初の節が続きます。これはイスラエルの民が、エレミヤの予言通りに捕囚から戻れたことを主に感謝している節です。

Benedixisti Domine terram tuam: avertisti captivitatem Jacob.

主よ、あなたはご自身の地（＝ご自身の民）を祝福されました、あなたはヤコブの民を捕囚から連れ戻されました。

昇階唱： *Liberasti nos*

聖霊降臨後第 23 主日（から最終主日）の昇階唱の歌詞は詩編 43 を下敷きにしています。この詩編の中でイスラエルの民は、今この悲嘆の時にあって自分たちを見棄てないでくださいと神に乞うため、過去に自分たちが神から受けた余りある善い業のすべてを神に思い起こしていただこうとしています。6 旬節の主日の入祭唱にはこの詩編の終盤の祈りが使われていました。今回登場する 2 つの節は過去の数々の勝利に対しての、民全体の感謝と賛美を表しています。

Liberasti nos, Domine, ex affligentibus nos: et eos qui nos oderunt, confudisti. In Deo laudabimur tota die, et nomini tuo confitebimur in saecula.

あなたは私たちを解放して下さいました、主よ、私たちに迫害する者たちから、そして私たちを憎む者たちを辱めて下さいました。私たちは常に神を誇りとし、永遠に御名を讃えます。

ここで表現されている感謝の念は、神がご自分の教会や、私たちの祖国や、私たち個人の一人一人に注がれた数々の恵みを思い起こす時、心から共感できるものです。そしてそこから、現在の数々の試練の只中にあっても、より大きな信頼を汲み取ることができることでしょう。後半部分は、私たちが希望を持って最後の審判のさらに先へと、私たちが忠実であればその先に待ち受けている至福の永遠へと目を向けるようにさえ促しています。

こうした見方をすれば、この昇階唱は喜びと熱意に満ちた賛美の性格を帯びています。そうした賛美は柔らかで優美な、上昇し下降する長いヴォカリーズ（母音を延ばす唱法）によって表現されています。

アレルヤ唱： *De profundis*

聖霊降臨後第 23 主日の入祭唱の心安らぐ主の御言葉と、昇階唱における、ついに罪から解放され、天で永久に主を誉め讃える選ばれた人々の熱意と希望にあふれる高揚の後、本日のミサのこれに続く 2 つの聖歌は、詩編 129、*De profundis*（深き淵より）によって世の終わりの不安で不確実な雰囲気へと戻っていきます。アレルヤ唱と奉献唱はこの詩編の最初の節から成り立っています。

De profundis clamavi ad te, Domine: Domine exaudi vocem meam.

深き淵から私はあなたに向かって叫びます、主よ。主よ、私の声をお聞き下さい。

アレルヤ唱が常に明るいとは限らないということは第 17 主日のアレルヤ唱に関して見てきたとおりで、本日のアレルヤ唱は、歌詞も旋律も第 17 主日のアレルヤ唱に近いものがありますが、より広がりがあります。このアレルヤのヴォカリーズはかなり長く、強い哀願の調子を帯びていて、モチーフは 2 度に亘って繰り返され、3 度目に展開されます。唱句は、第 17 主日のアレルヤ唱の場合と同様、とても表現力豊かな 2 度にわたる大きな上昇音を含んでいて、このアレルヤ唱の場合は 2 つの動詞、*clamavi*（叫ぶ）と *exaudi*（聞く）の箇所です。その後にもまた長いアレルヤのヴォカリーズが続きます。

奉献唱： *De profundis*

聖霊降臨後第 23 主日の奉献唱の歌詞はアレルヤ唱の唱句と同じですが、それでも若干の違いがあります。*vocem*（声を）の語が *orationem*（祈りを）という語に代わっています。その結果、「私の声をお聞き下さい。」の代わりに「私の祈りを聞き入れて下さい。」となります。旋律の違いはこの変更と関係しています。もはやアレルヤ唱の場合のように、切なる願いを伝えるのは、外面的で、

激しく、振動する声ではありません。ここにもまたとても表現力のある祈りがありますが、それは、奉献唱というものの全般に概して当てはまることですが、もっと内的で抑制されたものです。グレゴリオ聖歌の旋律が、同じ一つの歌詞にいかに異なった表現法を与えることができるかがわかります。

第 16 主日の奉献唱と同じく、この奉献唱は 3 面祭壇画のような形式を備えています。3 つめの句が^(歌註 2)最初の句と同じ言葉の繰り返しだからです。この最初の句と 3 つめの句が 2 番目のはるかに長い句を縁取っています。この 2 番目の句が長いのは *meam* (私の) という歌詞の部分が長いヴォカリーズになっているからで、このヴォカリーズはまるで終わるつもりがないかのようです。

拝領唱： *Amen dico vobis*

聖霊降臨後第 23 主日の拝領唱は、福音書を題材にした歌詞のある、短めのちょっとしたアンティフォナです。歌詞になっているのは聖火曜日に主イエズスが告げられた御言葉で、この箇所は実を結ばない無花果の木のエピソードと、山をも動かす信仰についての御言葉の後、またエルサレム滅亡と世界の終末の予言の少し前にあります。

Amen dico vobis, quidquid orantes petitis, credite qui accipietis, et fiet vobis.

よくよくあなた方に言うておく。あなた方が祈り求めるものはすべて叶えられると信じなさい。そうすればその通りになる。

ここにはまた入祭唱と同様に、世の終わりにある不安に満ちた人々の呼びかけに対しての、とても頼もしい神からの答えがあります。しかし入祭唱に比べると旋律ははるかに軽く、単なるちょっとしたレチタティーヴォのようで、すべての単語が適当な長さの音に対応しています。最後の *et fiet vobis* という箇所だけが幾分、他よりは厳かな断言となっています。

このミサの全ての聖歌と、典礼暦上の全ての聖歌はこんな具合に、平和と信頼と希望の雰囲気うちに完結します。私たちが通り抜けなければならない試練がどのようなものであれ、典礼書の章句を黙想するとき私たちは常にこの雰囲気へと導かれるはずです。

訳註 1 マタイ 13.24～30。聖霊降臨後第 24 主日の福音書朗読はこの箇所であるためこの譬え話が話題になっているが、第 25 主日の朗読はマタイ 8.23～27 で、別の箇所。

訳註 2 *De profundis clamavi ad te.* という歌詞の部分。